

実践上の課題に応じた家庭科の授業研究

和歌山大学教育学部 山本奈美
和歌山県立和歌山工業高等学校 深渡直子
和歌山県立向陽高等学校 川南ゆかり
和歌山県立桐蔭高等学校 北崎美和子
和歌山県立貴志川高等学校 高井真起子
大阪府立岸和田高等学校 宮武千波
那智勝浦町立那智中学校 松本年絵
串本町立串本中学校 廣井洸一朗
開智中学校・高等学校 西岡真弓
和歌山信愛中学校高等学校 田中敦代・入口鈴
東牟婁地方小学校家庭科研究会 代表 福田ルミ(色川小学校)

本研究課題では、各連携先に応じた実践上の課題を設定し、情報共有・意見交換等の活動を通して大学教員と小・中・高等学校の家庭科担当教員の双方の立場から、授業力の向上を目指したさまざまな活動に取り組んでいる。今年度の主な活動内容について、以下のとおり報告する。

(1) 東牟婁地方中学校家庭科講習会

日時:2024 年 8 月 8 日(木)

場所:那智勝浦町立宇久井中学校

内容:「中学校家庭科における防災学習」をテーマとして、調理実習を含む講習会を実施した。調理実習では、災害時の調理としてポリ袋を用いたパック調理(炊飯、ツナ缶カレー)を体験した。パック調理は、食材をポリ袋内に密封した状態で調理する方法で、加熱は湯煎によって行われる。1 人分ずつや 1 品ずつを衛生的に調理しやすいこと、洗い物が少なくて済むことや湯煎の湯を使い回せるために水の節約につながることなどを理由として、災害時の調理として推奨されている。中学校家庭科の学習指導要領では、B(6)住生活の機能と安全な住まい方の内容の取り扱いに「自然災害に備えた住生活の整え方についても扱うこと」と明記されているが、災害時の生活が日常生活の延長上にあり、日頃からの備えが重要であることを考えれば、家庭科における防災学習は住生活のみで扱われるものではない。衣生活や食生活を含めた生活を総合的に考える家庭科は防災学習との親和性も高く、さまざまな授業展開が考えられる。講習会では、昨年度の共同研究事業として取り組んだ和歌山大学教育学部附属中学校での防災学習の内容を紹介しながら、中学校家庭科での防災学習の取り組みの現状や今後の展開について情報交換した。

(2) 中学校家庭科における課題解決的な学習を取り入れた「蒸す」調理の授業開発

幼児のおやつとしての「米粉蒸しパン」を題材とした、「蒸す」調理の授業開発に取り組んだ。蒸す調理法は平成 29 年告示の学習指導要領において中学校家庭科の調理に関する学習内容に追加されたが、蒸し器の保有率が低いことが家庭実践の妨げになると懸念されたため、蒸し器がなく

でも「蒸す」調理が実践できるよう、調理器具の使い方の工夫を考えさせる学習活動を取り入れた授業を構想した。すなわち、はじめに蒸す調理の原理を理解し、蒸し器による調理を体験したうえで、次に課題として「身近な調理器具の使い方を工夫して蒸し器の代用とし、蒸す調理を実現させる」ことを提示し、その解決のための話し合い活動と実践に取り組ませた。

以下に、題材名「蒸しパンを作ろう」（全 6 時間）の指導計画を示す。

時間	学習内容	概要
1	幼児の食生活	幼児にとってのおやつの一の必要性和留意点（薄味、誤嚥のリスクなど）
2	米粉蒸しパンの調理（説明）	蒸す調理の特徴、材料と手順、実習上の諸注意
3	米粉蒸しパンの調理（実習）	蒸し器を用いた蒸しパンの調理実習
4	課題設定と調理計画	フライパンを用いて蒸す調理を再現する方法の検討と追加材料を含む調理計画の作成
5	米粉蒸しパンの調理（実習）	各班の調理計画に基づいた調理実習
6	実習のまとめ・発表	実習の評価と発表、家庭実践に向けた新たな課題の設定（個人）

授業は開智中学校 3 年生を対象に実施され、大学教員もその一部を参観した。参観後に協議の機会を設け、授業内容の改善を図っていった。

授業後の生徒アンケートからは、蒸す調理の特徴や方法が理解できたと認識している生徒が多く、家庭実践への意欲の高まりや自信を感じさせる結果が得られた。

幼児の食生活に関しては、岸和田高等学校でもアレルギー対応を考えた調理実習題材の検討に取り組んでおり、中学校での本実践内容や子どもの窒息事故防止のための資料を情報提供した。日程が合わず授業の参観は叶わなかったが、対面での打ち合わせとメールでのやりとりを通して意思疎通を図り、共通の課題意識のもとで授業づくりに取り組んだ。

（3）高等学校家庭科における授業研究

近畿大会での発表に向けた授業研究として、前年度からの継続で取り組んでいる。今年度は教科横断的な視点から家庭科の授業内容を検討し、家庭基礎「栄養と食品のかかわり」において化学の教科内容との関連を図った授業を計画、実施した。本授業は和歌山県立向陽高等学校を会場として行われた和歌山県教育委員会主催の授業力アップのための公開授業として県立学校教員に公開され、そこに大学教員も参加した。授業参観後の情報交換会では、参加者それぞれの立場からの意見が交わされ、学校現場の状況についての認識を深める有意義な機会となった。教科横断型の授業として他教科との連携を図りながら授業づくりを考えていくことは、家庭科の学習内容としてなにが重要になるのかを改めて考えることにもつながっていた。授業の展開や時間配分等の見直しを行い、よりブラッシュアップしていく予定である。

また、同じく前年度からの継続である貴志川高等学校における授業実践はまとめの段階に入り、「郷土の恵みを生かした調理実習から学ぶ」と題した研究報告としてまとめられた。地域の食材を活用して行う調理実習の題材開発と、生徒の学習意欲を高める指導の工夫と実践を研究の 2 本柱とし、調理実習の題材では基礎的な調理技能を網羅できることや生徒の家庭実践につながることなどに配慮した題材開発が行われ、調理実習を軸としながらそこに食生活の学習内容を組み入

れた構造的な指導計画を練り上げていった。生徒の学習意欲を高める指導の工夫としては、独自のビデオ教材やワークシートの開発に取り組んだ。ワークシートにはポートフォリオの機能を持たせ、生徒自らが自身の変化や成長を実感し、新たな課題が発見できることを目指した。これらの授業者の意図や実践の成果が伝わるよう、発表資料の改善に連携して取り組んだ。

東牟婁地方小学校家庭科研究会とは、8月下旬に1人1台タブレットを使った授業の事例や防災学習の実施状況等についての情報交換会を企画していたが、台風の接近に伴って急遽中止となった。代わりの日程を確保することが難しく、本報告書作成の時点までに実施には至っていない。

小・中・高等学校と大学の授業期間にずれがあること、家庭科は時数が少なく授業の曜日が限定される等の事情から、授業参観の日程調整にも苦労しているが、家庭科が置かれた現状を考えると、学校や校種を超えたつながりの必要性を強く感じている。今年度は共同研究事業から生じたつながりをきっかけに、和歌山県高等学校家庭科教育研究会の研修会講師を大学教員が務めることになり、学習指導要領に関する近年の動向や家庭科における小・中・高等学校を見通した学習内容の系統性について話題提供した。より多くの家庭科の先生方との交流の機会となり、学校現場における学習指導の実際や教材の工夫、課題等について意見交換することができた。本共同研究事業を通して構築してきた小・中・高等学校と大学との関係を、今後も継続、発展させていきたい。

